

聞き書き史談ほか萬控え(六)

海部の相撲史を追って その二

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島)

(八) 嶋威九十郎

本名は赤追九十郎、嘉永三年(一八五〇)上浦町浅海井浦に生まれた。暁嵐公園にある記念碑には大坂時津風門内嶋威九十郎とあり、ほかの力士のように門人・門弟と明記してないので、実際に入門していたかは定かでないが、大正十三年(一九二四)七十四歳の時、所持していた「頭取」の免許状を瀧の音治策(十)(愛弟子か?)へ譲渡しているから、或いは入門していたのかも知れない。昭和六年八十二歳の高齢で死亡した。

(註)浅海井浦では瀧嵐孫平の死亡(明治十年)後も、瀧ノ首五郎吉と吉野川芳五郎の二人が「頭取」として在任していたことは明らかであるが、消息は分からなかった。なお、孫平が死亡した年、九十郎は二十七歳になっていたから、前記の二人は九十郎より二十年前

後先に生まれていた可能性が強い。



嶋威九十郎碑(暁嵐公園)

(九) 百貫こと新名平八

平八は文久三年(一八六三)三月、旧木立村大野に生まれ、昭和三年(一九二八)四月、六十五歳で死亡した。平八は木立が生んだ三力士の中で最も明治に近く、山嵐と大乃松とは十五・六歳の開きがある。

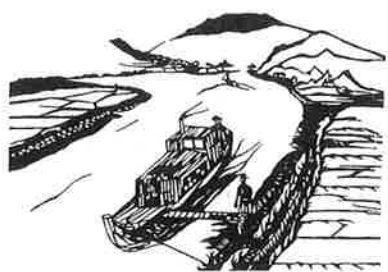
四肢名しごなを持つていたか否かは定かでないが、愛称を「百貫」と呼ばれてこの方が通りがよかった。それは百貫(三七五キロ)の重荷を背負う程力が強かったことからつけ

られたと言い、同じ大野に住む姪の証言によれば、元横綱千代の富士のような、筋骨逞しい体軀と風格があったという。

相撲は随分強かったと言い、若い頃は各地の宮相撲に参加して百貫の名は広く知られていた。平八には逸話が多く残っており、その幾つかを紹介しよう。

(一)相撲を取っていた頃余興として、米俵を両手(一俵六〇キロ)に下げて土俵の廻りを一周したり、坂道で木材を満載したキンマ(運搬用の櫓で昔はよく使われていた)と出合い、押し戻して道を空けた話、おろし(木立の土井と角道から船頭町の上り場まで、客を運んでいた発動機船)と引つ張り合いをして双方共動かなかったという話、などがある。

(二)妻の実家の縁側に沓脱ぎ石が据えられている。当主の話ではその石は浦代峠から松浦方向に五百^{メートル}程寄った山の尾根付近にあつ



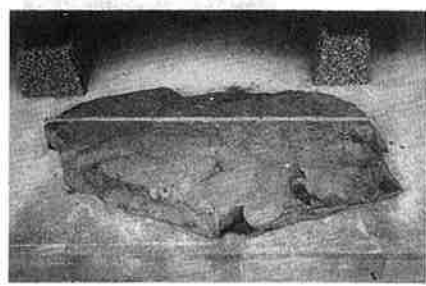
おろし

たものを、背板(木立では「かるい」といった)を使って運んだという。

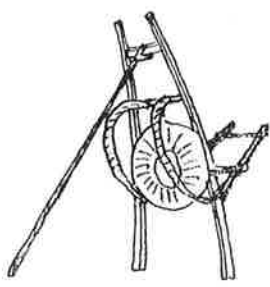
この石を実測して見たら重さは優に一六〇キロはある。

そこで今度は二万五千分の一地図によって距離を測ったら、直線で一・八キロあるから、曲線を含めた斜距離に直せば二・五、六キロにはなる。しかも半分以上は急な下り坂の小径であったことを思えば、力量の程が知れよう。

余談になるが、背板は昭和四十年代までは時折り見掛けることもあつたが、今は目にすることながない。これは昔から使われてきた運搬用具の中でも最も簡便で、人が行け



沓脱ぎ石



背板

る所なら随分重い物でも自由に運ぶことが出来た。

但し、普通の人の場合、体重と同じ位までが限度ではなかったかと思う。平八の場合、倍近くの石を二・五、六キロも運んだわけであるから、如何に強靱な体力を備えていたかが分かる。

平八はまた、若い人に花を持たせる負け相撲も実にうまく、見事な負けっ振りで会場を湧かせたという。

(十) 瀧の音治策

本名は吉田治策、明治六年（一八七三）浅海井浦に生まれ、昭和十一年（一九三六）旧暦十月、六十四歳で死亡した。治策が生まれた年から四年後には同じ浅海井浦の瀧嵐孫平が、六年後には浪太浦の二本立染蔵が死亡している。最も活躍した時代は、明治二十年代の後半から三十年代にかけてとなるから、前記二人よりは大分後の力士である。



(上浦町の文化財より)

大正十三年師匠？嶋威藤右衛門から譲られたという

「頭取」の免許状（前掲）は五十一歳の時であるが、翌十四年には現在の日本相撲協会が発足しているので、頭取の免許は治策が最後ではなかったろうか。

家人によれば、体格は人並み外れであったと言い、後年は足を痛めて相撲から遠ざかっていたそうである。

(十一) 小倉山堅吉（生年月・年令不詳）

弥生町井崎にある西運寺の上小倉側登り口に墓がある。穂石には中央に小倉山之墓、右側に雪見山門弟とあ



小倉山墓(西運寺登り口)

り、台石には願主扇山徳藏の名がある。

出納家の位牌には小倉山こと山王（山王は上小倉のうち）又兵衛弟とあり、文久三年（一八六三）三月十二日没と書いてあるが、これ以外は何も伝わっていない。

そこで西運寺に行き調べて貰ったところ、過去帳には俗名堅吉と記されていたが、年齢は書いていなかった。なお、過去帳には文久三年も終わりの十二月末になって書き加えられており、住職の話では大方他所で死亡し供養した後、暮れになって西運寺へ届けられたのではないかと言う。

津久見市四浦久保泊に在る小町川虎之介碑（後述）には、頭取雪見山鉄右衛門（小倉山師匠）と、伊豫や肥後の力士と並んで小倉山戸吉の名が刻んであることなどから同一人と見て間違いなく、当時盛んであったという奉納勸進相撲に、師匠雪見山と共に各地を巡業中死亡したと考えられる。

(吉) 荒浪利三郎（姓及び生没年月・年令不詳）

大入島荒網代浦の集会所裏に記念碑がある。碑文から大坂相撲の時津風部屋に入門していたこと、明治十五年

（一八八二）の旧暦三月十八日に建立されたこと、などが分かった。台石には世話人と弟子の四股名が刻んであるが、世話人の方は風化して読み取れない。刻まれた弟子は十八人である。

瀧風公園にある瀧嵐孫平の碑には世話人の中に利三郎の名があり、荒網代浦の相撲連中も十六人名を連ねているが、七年前のことだけに重複する者も多い。

利三郎は、孫平の碑には世話人としてその名が見えることから、何歳か年下であったのではないかと、弟

荒網代浦に利三郎のことを知る人はいなかったが、弟



荒浪利三郎碑（荒網代集会所裏）

子に十八人もの相撲連中がいながら、どうして逸話の一つや二つ聞けなかったか、残念に思えてならない。

(三) 九紋龍大五郎

(生年月・年齢不詳)

本名は日高大五郎と言い、蒲江町の猪串浦に生まれた。若い頃「関取」を目指して大坂相撲に入門(所属部屋は不明)した。力士となった切っ掛けは王子権現(本蒲江)の奉納相撲で優勝したことに始まると言われている。記念碑には大関九紋龍と刻んであるが、大坂相撲で大関を張っていたのか、それとも佐伯地方だけで認められていたものかよく分からない。

日高家の位牌には戒名と並んで俗名九紋龍大五郎、大正二年(一九一三)一月二十六日没と書いてあるが、年齢は書いていないので何歳であったか分からない。

上蒲町の曉嵐公園にある瀧風孫平碑側の孫平伝には、九紋龍が小川の熊といていた頃、藩のお抱え力士となっていた瀧風と、高謙公の御前で相撲を取って負けたという件があるが、九紋龍の年齢が分からないと立ち合いは可能であったか立証できない。

高謙公は十二代藩主として文久二年(一八六二)から、

版籍を奉還した明治二年(一八六九)までの七年間藩主の座にあった。一方、瀧風は明治十年に六十四歳で死亡したが、九紋龍と立ち合ったのは帰京後十年位経ってからと書いているので、瀧風三十歳位の時となる。したがって、この御前相撲は高謙公ではなく高泰公の時代と考えたよい。

そこで九紋龍が当時十八歳前後の若者であったと仮定すると、九十歳近くまで長生きしていなければ辻褄が合わないことになる。仮に孫平伝に書いてあるとおり高謙公の時代であったとすると、その時孫平は五十歳前後となるから、九紋龍の年齢も大分違ってくるが、果たして孫平が五十歳でも相撲を取っていたか疑問に思う。

四股名の由来は掌に一文銭が九枚並べられるということから、九紋龍と呼ばれるようになったという。

ちなみに一文銭は直径が二・五センチから二・八センチとまちまちであるが、小径の方二・五センチとして計算しても二十



二・五センチになる。

そこで残されていた九紋龍の手形(註)を測って見たら、二十六センチあった。

参考のため今の横綱のうち一人の手形を測って見たら二〇・五センチであった。これと比べて九紋龍の掌が如何に大きかったかが分かる。

相撲は「かんぬき」を得意技としたが、この決め手を用いて締め付けられると、相手側は動きが取れなくなつて下手に動けば腕の骨が折れ、相撲が取れなくなるといふ危険性があったため、封じ手として禁止されたという。以下は力が強かつたということを立証するに足る聞き書きである。

猪串浦の
前に弁天島
(今は陸地
続き)とい
う小さな島
があり、山
頂に天満社
がある。宝



弁天島の石段



九紋龍碑(猪串浦)

永七年(一七一〇)の創建で、併祀の巖島神社は正徳四年(一七一四)の創建である。若いと言っても子供の頃かも知れぬが、この社の表参道造りが地域住民の出合いによって行われた。その時石段に使用された石のうち、大きい方は殆ど一人で引き受け、住民は小さいものばかり運んだという。そこで石段のうち一つを実測して計算したところ、重さは約一五〇キロになった。そんな重い石を四〇度から四五度もある斜面を擔いで登るには、並み外れた力持ちでないとい出来る業ではない。

また、子供の頃から塩かます(約六〇キロ)を片手で

運んだり、酒の入った四斗樽と空樽を両手に下げて運んでも、どっちが空樽か見分けがつかなかったという話など、力自慢に關係した逸話が多い。ちなみに実入りの酒樽は正味だけでも七〇キロである。

写真の記念碑は昭和八年、地域の人達がその功績を称えて建立したもので、昔は傍に大松があつて夏場は恰好の涼み場となつていたという。

〔註〕手形は聞き書きのため蒲江町へ行ったとき、町役場に会員の富高丈夫氏を尋ねて所持している人のいることを知り、コピーをお願いしていたものである。

なお、手形には九紋龍と大書し贅が書き添えられているが、左手であることから、ひよつとして九紋龍の利き腕は左であつたのかも知れない。

以上十三人のほか上浦町には、浪太浦の二本立染藏碑に名がある瀧の音五郎吉と、吉野川芳五郎の二人の「頭取」があり、津井浦には森ヶ濱(山本幸助(四浦久保泊に在る小町川虎之介碑には、頭取森ヶ濱幸介と刻んである)の墓もあり、こちらも二十三人の弟子が名を連ねている。また、蒲戸浦の本行寺墓地には、明治二十三年十

二月に建立された濱之松又藏と、明治三十三年十一月に建立の荒磯駒吉の二つの碑があるが、以上五人の足跡については知ることができなかった。

なお、荒磯駒吉の碑には台石に頭取留藏の名が見られることなどから、ほかにもまだ何人かの「頭取」がいたのではないかと思う。

さて、幕末から明治・大正と海部の相撲史を追って行くうち、津久見市の旧領域にも相撲道に精進した人達の記念碑が在るはずと考えたが、地理に疎いため状況を把握することができない。そこで会員で津久見史談会事務局長の酒井博氏にお願いして、御夫妻と文化財調査委員の織田清綱氏の三人に現地を案内して頂き、後日改めて聞き取り調査も行った。その結果次の人達が活躍していたことを知った。

(一) **小町川虎之介** (生没年月・年令不詳)

本名小町虎之介、四浦久保泊に生まれ、のち佐伯藩のお抱え力士になったということから、大坂相撲に入門していたと思うが記念碑には何も刻まれていない。天保十年(一八三九)亥年十二月十八日建立となつているの

で、浅海井浦の瀧風孫平より少し前の時代に活躍した力士である。

台石には頭取雪見山鉄右衛門、同じく森ヶ濱幸介(幸助・津井浦)、並びに肥後・伊豫の力士と並んで小倉山戸吉(堅吉・文久三年八一八六三〇死亡・上小倉)の名があり、上野村の石工文吉の手によって作製され運ばれたことも分かったが、力士間ではそれ以前から相互に交流していたものと思う。

佐伯夜話によれば、当時藩士関谷長久の馬術と、落の



小町川虎之介碑(久保泊)

浦歳太夫の浄瑠璃、それと小町川の相撲は佐伯の三大名人といわれていたと言い、小町川には敵対する力士がいなかったことが仇となつて、佐賀の関の権現相撲の夜、相手方によつて毒殺されたともいう。

小町家には証しとなるものは何も残つていなかったが、当主の話では先代・先々代共相撲は強かつたそうである。

(二) 岩ヶ嶽文吉(生没年月・年齢不詳)

本名は鈴木文吉と言ひ、明治三十一年(一八九八)正月、二人の世話人によつて記念碑が建てられ、三十八人の相撲連中が名を連ねているが、これ以外のことは何も記されていない。

碑には大阪三保ヶ関内と刻んであり、門人・門弟とはなつていないので詳しいことは分からないが、郷土史家の資料によれば関取まで進んだとしている。

〔註〕津久見には十基に余る記念碑があり、そのうち五基には所屬した部屋が明記してあるが、いずれも何々内となつていて、上浦町や鶴見町のように門人・門弟としたものはない。なお、刻まれた力士名も重複する者が随分

多いことから、弟子はそのうち少数ではなかったかと思ふ。

③ 沖ノ石辰造

本名日下辰造弘

化元年(一八四四)

に生まれ、大阪三

保ヶ関部屋に入門

して相撲に精進

し、引退後は警固

屋に住んで後進の

指導に当たり、大

正十五年(一九二六)八月八十三歳で死亡した。最も活躍

した時代は幕末から明治中期にかけてであった。

記念碑は小網代(現・元町)の旧道脇にあり、八人の発

起人・世話人と、三十九人の相撲連中が名を連ね、明治

四十一年(一九〇八)正月、六十四歳の時建立されたもの

である。



高尾浪住吉 碑

岩ヶ嶽文吉 碑

(上宮本長泉寺横)



沖の石辰造碑(小網代)

家人の語るところによれば、津久見で相撲の採め事は、沖ノ石が出て行かないと、解決しないといわれていた、と言う。

④ 谷嵐弥四郎

本名は上杉弥四郎と言ひ、嘉永五年(一八五二)彦の内

に生まれ、同所路木の旧家上杉家の養子となった。高尾

浪住吉とは一つ違いで二人共養子という境遇と、同じ時

津風部屋に入門(時期は不明)したという経歴などから考

えて、良きライバルであつたのではないか。記念碑は明治四十四年（一九一）二月五十九歳の時、五人の発起人と世話人によつて建立されたもので、頭取五人と行司一人に、二十七人の相撲連中が名を連ねている。



谷嵐弥四郎碑(彦の内)



引退後は農業の傍ら若い力士達の指導と、同所路木橋の近くや近郷近在で行われていた相撲大会では、常に中心となつて世話をしていたと言ひ、晩年には親族の寄り合ひで、子供達に座敷相撲を取らせて興じていたという。大正十二年（一九二三）一月七十二歳で死亡した。写真
は弥四郎と住吉の名場面を今は亡き養女さだ子氏が、布と綿を使ってこしらえた額入りの木目込み人形である。

(五) 高尾浪住吉

本名は高木住吉と言ひ、旧臼杵領の青江で生まれ、上宮本の旧家高木家の養子となつた。若年の頃大阪時津風部屋に入門（時期不明）して相撲に精進したが、引退後は津久見に帰つて明治後期から大正にかけて、地域相撲の世話人として尽力したという。

昭和十三年頃八十六歳で死亡したと家人はいうから、逆算すると嘉永六年（一八五三）生まれとなり、最も活躍した時代は明治初期から中期にかけてとなる。生来筋肉質の偉丈夫であつたらしく、相撲の世話をしていた頃着用したという薄水色の上下と袴が、最近まで残つていたと家人は語つていた。

記念碑は大正二年（一九一三）二月六十歳の時、三人の世話人によって建立されたもので、八人の頭取と三人の行司、四十四人の相撲連中が名を連ねている。

（六） 錦川豊吉

本名多田豊吉、明治九年（一八七六）上宮本町に生まれ、昭和二十年（一九四五）一月七十歳で死亡した。若年の頃大阪時津風部屋に入門して相撲に精進したが、引退後は津久見に帰り、三幸丸という持ち船で海運業を営む傍ら、相撲の発展に務めたと言い、商取り引きの関係上、上方



錦川豊吉碑(大友町)

や瀬戸内から、よく力士達を連れて来ては面倒を見ていたという。

最近、当時使用していたという名刺を発見したと言っ
て見せてくれた。それには三幸丸多田豊吉とあり、住所
は津組町と印刷してある。家人によれば昔は三幸丸を屋
号としていたというが、最近では殆ど使われていないと
いう。

残された晩年の写真を見ると、普通の人と比べて背丈
が随分違い、肩幅が広くガッチリした体軀である。さぞ
かし現役の頃は筋骨逞しい若者であつたらうと推察した。

記念碑は岩屋川沿いに若花初五郎の墓と並んで、十七
人の発起人や役員と、三十九人の相撲連中が名を連ねて、
大正八年（一九一九）二月、四十三歳の時建立されたもの
である。

以上六人の外、岩屋川沿いには若花初五郎（武田）の墓
が錦川豊吉の碑と並んで立つが、初五郎の墓は岩屋若連
中によって建立されたということ以外、何も知ることは
出来なかつた。

また、えびす島口の国道沿いには、明治十五年四月建
立の濱風半次郎（高木）と、四浦落の浦公園には明治二十

四年三月建立の武蔵川善吉及び、明治四十五年三月建立の関之戸兵助の碑があるが、二人共消息は不明であった。

一方、津久見では力士に寄らず行司まで碑文に名が見え、当時使用していたという日月の軍配を保存した家や、他国より来て土俵上に不慮の死を遂げた力士を悼んで碑を建てるなど、相撲に対する力の入れようが他の地域とは一味違った印象を受けた。

大正から昭和に入って、相撲は個人戦から地域対抗の特色が一段と濃くなつて行つた。

相撲は腕・腰・脚を鍛えなければ上達もしないし強くもならないとは冒頭にも書いた。それは一押し二押し三に押しという相撲の基本に撤するためでもある。ところが、現在ではこれにプラス技がなければいけないという。つまり相撲をより楽しく見せるためには、両者とも互いに相手の力を利用しながら技を用いてこれを倒し、観客を熱狂させることが肝要だからである。その点昔の相撲はぶつかり合いの力競べで面白味には欠けていた。理由は技を教え技倆を引き出し、伸ばして行く指導者がいなかったことでもある。したがって、力の強い者が自信過

剩に陥る傾向もあった。それが昭和に入つて力士の養成指導方法が充実してくるにつれて、技相撲が急速に伸びてくるようになったという。

ところで、聞き書きを進めて行くうち、大正から昭和と時代が下がるにつれ、海部の相撲界には大中小の五番制(各番五人)などという番付があつたことを知り、強さに応じてそれぞれにランクされていたことも分かつた。なかでも大五番級になると実力は相当なものであつたらしく小さな宮相撲では相手に遠慮して出場しなかつたそうである。この五番制は恐らく幕末の頃から、既に制度化されていたのではないかと思う。

宮相撲はその規模に大小の差こそあれ、昔はこの村でも行われていたというが、昭和十年代なお盛んであつたと聞いたのは次の四ヶ所であつた。

- 一、弥生町・西運寺
- 二、鶴岡・若宮八幡社
- 三、八幡・大宮八幡社
- 四、津久見・赤八幡社 (順不同)

ほかには宇目町千束の鷗尾神社と、重岡の八柱神社の

合同祭典で御旅所のあった八匹原でも、奉納相撲は昔から行われていたが、近年に入り大分県南部と宮崎県北部の対抗相撲が行われるようになって、より盛んになったという。大会の起源は定かではないが、夜相撲として知られており、明松を焚きながら夜半までかけて取り組みをしていたという。しかも両軍共強い力士を選びすぎたというから、大五番級でないと出場出来なかつたそうである。

相撲は白熱した勝負で盛り上がりを見せ、出場した力士には祝儀を出し、観客には酒食の接待があったといつた、申し分のない大会であつたという。同じような対抗相撲は三の丸でも開催されていたが、こちらは駅前町の吉田藤平氏（故人）が発起人となつて諸事万端世話をやき、大会を成功させていたという。

こうして見ると明治から大正の頃には、もっとより多くの寺社で行われていたに違いない。ちなみに津久見市の場合十五ヶ所程あつたと言ひ、落ノ浦では昭和三十年頃まで開いていたという。

一方、地方相撲では力士同志の連帯感が強く、相互によく連繫を取り恰も見えぬ糸で結ばれているかの如き繫

がりがあつて、互いに競合していたという。このことは宮相撲という永い歴史の中で、先人達により培われてきた管鮑かんぼうの交わりなのかも知れない。

脱稿だくこうにあたりかつて、相撲道に精進していたという古老から意見を求められた。それは一般的に言つて強い力士は農村より漁村に多く育つと言われている。そのことは上浦や鶴見・四浦などの例を見れば明らかであるが、その漁村部で、宮相撲がそれ程盛んでなかつたのは理解に苦しむ、と言うのである。これには何か社会的難題がありそうに思われて返答に窮した。今後の研究課題としたい。

しかし、相撲道に限つて言えば上浦町や津久見市の場合、伝統は確実に継承されて、戦後行われるようになった県体を初め、国体や各種大会にはつねに優秀な成績を収めている。

以上大正から昭和初期までの宮相撲について、聞き書きにより判明した内容をまとめて見た。以下は昭和初期まで佐伯地域で活躍した人達である。なお、今回は都合で他の地域については調査しなかつた。

(一) 米花山

本名平山頼幸、明治三十二年（一八九九）旧中野村小半の高橋家に生まれ、佐伯市鶴望の平山家に婿入りした。

昭和五十二年七十八歳で死亡、四股名は故郷の山米花山（標高六〇六^ミ）に拠つたものである。子供の頃から体格は人並み外れて大きく力も強かつたという。馬匹運輸を職業としながら各地の宮相撲に参加していたが、力士集めや情報提供など、勸進元裏方の仕事をよく手伝つていたという。

(二) 角矢数馬

明治四十四年（一九一）大入島塩内浦で六人兄弟の五番目として生まれた。子供の頃から体格に優れて相撲が強く、成人後は農漁業に従事しながら相撲を取り続けていたが、のち神戸市の圧延工場（神戸製鋼か）に入社して数年間勤めたと言ひ、会社では相撲のため仕事面でもかなり優遇されていたという。

逞しい体付きに似合わず性格はおとなしく真面目であつたが、陸軍に召集されて昭和十九年七月十八日、マリアナ海域の戦闘に於て三十四歳（享年）の若さで戦死した。

若い頃には佐伯中学で、相撲の夏期指導をしていたと家族はいう。

(三) 城山

本名野中良一、大正元年（一九一）佐伯町田の浦に生まれ、昭和三十五年四十八歳で死亡した。日本セメントに勤める傍ら、相撲と聞けば仕事は放つて置いて参加したという。骨格の逞しい人であつたが背丈はそれ程ではなかつたようだ。スポーツは万能で、子供の頃は相撲よりむしろ野球に興じていたそうである。昭和九年佐伯航空隊が開設されてからはよく隊員の相手をしたり、県代表として国技館にも出場し、セメント会社の大会ではいつも代表として参加していたという。

相撲はつねに正攻法で、取り口に邪心のない人であつたというが、家庭内では至つて無口で気難しく、外向きとは別人のようなどころがあり、同調するのに気苦勞したとは奥さんの述懐談である。しかし、当時の佐伯町では相撲取りとしての名は良く知られており、郵便物に名前がなくても、「佐伯の相撲取殿」と書いてあれば、間違ひなく届けられたという。

四 坪矢義恵

大正七年(一九一八)米水津村色利浦に生まれ、子供の時からスポーツは得意であったという。旧制佐伯中学で相撲部に籍を置き、明治大学に進んでからは学生相撲で



腕を上げ、双葉山と取り組んで勝ち星を上げたことなどあつて、一躍その名を知られたという。後年日本相撲連盟から授与された写真のような認定書が残されている。背文はそ

れ程ではなかったが、ガッチリした体格であつたと言ひ、得意技など聞いたことはないが、「時折り私を捕まえて足を払う仕草をしていたから、或いは足技を得意としていたのかも知れません。」と奥さんは言う。大学を卒業後は満州へ渡り、戦後引き揚げて郷里へ帰り、永い間色利郵便局長を勤めたが、平成三年四月七十三歳で死亡した。

前記の段位証書については、生前誰にでも授与されるものではないと言つていたというが、彼が四十六歳の時であつたことを考えると或いはそうかも知れない。それは現役時代の活躍が認められてのものであろうから、幕末から明治にかけて、在地の力士達に付与されていた「頭取」に匹敵する免許ではなかつたろうか。ただ、前者は弟子を取ることも含めた興行権であるのに対し、後者は指導者としておぢやけ公の資格を認められたものである。なお、段位については詳しいことは分からなかつた。

終わりに今回の聞き取り取材について、各地域の会員や関係者から資料や情報の提供を受けましたが、一知半解で不十分なながらも一応完結することができました。紙上を借りて厚くお礼申し上げます。